上田貴子　著

# 奉天の近代

## ――移民社會における商會・企業・善堂――

塚瀨　進

本書は清末から滿洲事變までの期間の奉天を取り上げ、「都市奉天の近代」について論じている。清末以降、中國東北の狀況が大きく變化する中で、奉天での近代は「どのような形で展開したかをより多面的に描き」だし、「人間社會を圓滑に動かすために組織された團體の變化、人の營みの變化、人と人との關係のとり結び方の變化に焦點をあわせて考察」（六頁）することを課題として掲げている。具體的には、奉天總商會、奉天官銀號、奉天紡紗廠、奉天同學堂などを考察することにより、奉天の近代の特徴について檢證した研究である。

本書の構成は以下である。

序章

第一部　奉天總商會――地域政治と地域社會

第一章　奉天における光緒新政――公議會から商會への改組

第二章　辛亥革命後の奉天經濟界――奉天地域社會の階層分化

第三章　山東幫の衰退と權力性商人――奉天總商會內における張作霖勢力の擴大
第四章　張學良時期の改革――南京國民政府と東北地域主義
第五章　東三省商會聯合會と奉天總商會――奉天總商會による東三省經濟界統合の試み
第二部　東北の經濟構造――東三省官銀號と奉天紡紗廠を中心に
第六章　一九二〇年代東北の經濟構造――金融・特產物取引における權力の伸張
第七章　東三省官銀號の東北經濟における役割――支店網の擴大と附帶事業
第八章　東北における近代產業の育成――奉天紡紗廠を中心に
第九章　奉天票暴落期の倒產から見る經濟界――新興零細資本と傳統的商業資本
第三部　奉天同學堂――地域社會の安全瓣
第十章　同善堂に集まる人々――棲流所と游民・貧民對策
第十一章　同善堂に集まる女たち――移民社會における濟良所の役割
第十二章　同善堂とはなにか
終章

「序章」で提起しているこれまでの研究にない特徴として二つ擧げたい。第一には史料についてである。著者はこれまでの研究史を概觀し、「いずれの研究も實は現地で生きる人々の社會にある論理や規範に接近しきれていないという限界がある」（九頁）と指摘し、そうした限界は從來の研究は滿鐵など日本人が作成した調査報告書に依據してきたため、日本人の理解した滿洲が前に出てしまい、中國人の論理にまで理解がとどいていないと主張する。それゆえ遼寧省檔案館所藏の檔案を使うことにより、從來の限界を突破し、「地域社會の論理」を描き出したいとする點である。

第二には、「權力性商人」という用語を使うことで、奉天で活動した商工業者を分析する點である。權力性商人という用語を使う理由として、「從來の研究で官僚資本・官商とよばれてきた政權と結びついた經濟人を權力性商人と定義し、その特殊性も考察する。ここで舊來からの用語をつかわず、『權力性』という修飾語で表現するのは、この時期の奉天を見る際に、權力との密接な關係の取り結び方は注目に値するためである」（一三頁）、と述べている。

以下では內容について述べてみたい。

「第一部　奉天總商會――地域政治と地域社會」では奉天總商會の動向を檢證し、奉天總商會が政治權力や在地社會といかなる關係性があったのか考察する。その際、①混亂期（一九〇五～一九一一年）、②安定期（一九一一～一九二四年）、③變動期（一九二四～一九三一年）の三期に時期區分して考察している。

「第一章　奉天における光緒新政――公議會から商會への改組」では、公議會から商會への改組に焦點をあてている。一九世紀後半以降、東北の人口は增えはじめ、都市が形成され、商業が勃興した。そうしたなか商人たちは自發的に公議會をつくり、商人が個人的には解決できない案件についての合議や、商人の意見を代辯する機關を組織した。だが、官憲により公的に認められた組織ではなかった。二〇世紀初頭になると清朝は「商會簡明章程」を公布して、商人の組織化に乘り出した。奉天の商人の特徵として、官の意圖に對應できないまとまりのなさ、改革に對應できない保守性、反抗的な態度が指摘されており、かかる狀況を改めて官の期待に應えることのできる組織にすることが目指された。一九〇六年二月に奉天では商務總會が成立したが、一九〇八年に起きた抗房捐運動を調停できなかった。商會長の趙國廷は房捐に贊成する立場から反對する商人を說得したが、多數の反對に會い失脚してしまった。商會は未だ商人に對する影響力が低く、十分に商人を組織できない狀況であったと指摘する。また、多數の商人は客商であり、在地化していないことも商會の影響力が低かった要因だとする。以上の狀況から混亂期として、この時期を特徵づけている。

「第一章　辛亥革命後の奉天經濟界――奉天地域社會の階層分化」では、辛亥革命後の狀況を考察している。人口が增え、都市としての奉天が擴大するなかで、商會は製造業者、雜業者などの下層の商人をも吸收していた。そのため、製造業者を中心に組織された工會との間に、會員の獲得をめぐり對立が生じてしまった。とはいえ、趙爾巽や徐世昌のような大きな指導力を持つ行政擔當者もあらわれなかったこと、會長は孫百斛（一九一一～一九一七年）、魯宗煦（一九一八～一九二三年）が長く在職したことから、總じて安定的に推移したとしている。

「第三章　山東幫の衰退と權力性商人――奉天總商會內における張作霖勢力の擴大」では、奉天總商會に張作霖政權の影響力が及びはじめたことに焦點をあてている。一九一八年から會長には山東幫の魯宗煦が就いた。一九二四年五月に行われる豫定の商會長選擧の前に、魯宗煦は商會運營にあたって不正經理をしていたとの告發を受けた。このため、魯宗煦を中心とする山東幫への反發が强まり、魯宗煦は會長からはずれた。新たに會長に就任したのは、張作霖政權と關係が深い張志良であった。この會長交代を、「流通業で經濟力を築いてきた山東幫から、政權の權力を積極的に使い官商筋による特產物流通によって蓄積された富を使用できるもの、つまり權力性商人へと指導層が變化していった」（六五頁）と評價している。そして、權力性商人とは、「政府系金融機關である東三省官銀號や官僚や軍人たちが主な出資者となり官商筋とよばれた金融機關から、資金援助を受けた存在」（六九頁）だとする。こうした商人はマッチ、ビール、紡績業、窯業などに出資し、輸入代替化を志向する傾向にあった。それゆえ、輸入により利益を得てきた雜貨商とは利害が對立していたが、奉天總商會の會長が張志良になったことから輸入商の勢力は減退し、「商會は地方政府に聯動して動く存在」（七〇頁）になったとする。一九二四年以降を政權からの支配を受けるようになる變動期（「終章」三〇四頁三行、一〇行では「變革期」としている）として位置づけている。

「第四章　張學良時期の改革――南京國民政府と東北地域主義」では、張學良政權期の奉天總商會の動向について述べる。國民政府に合流したことから奉天總商會は改組を求められた。しかし、國民黨支部からの承認も必要になったこと、

新たな商會法への準據が困難なことから、改組には時間がかかった狀況を檢證している。改組後の會長の金恩祺、副會長の盧廣積は張學良政權がめざす「國貨運動や國民政府との協調という政治方針を共有できる人材」（七六頁）であったとし、このことから政權の動向により商會も影響を受ける以前からの動向が繼續していたと評價している。改組により幹事選出の方法も變わり、業種ごとに代表を一～二名に制限した。そのため、幹事構成における絲房出身の人數は減少し、絲房の商會內での發言力は弱まった。そして、權力性商人による商會運營が圓滑になったとする。

「第五章　東三省商會聯合會と奉天總商會――奉天總商會による東三省經濟界統合の試み」では、東三省商會聯合會と全省商會聯合會について考察している。東北には六つの總商會（ハルビン、チチハル、長春、營口、安東、奉天）が存在したが、張作霖政權による東三省の政治的統合が進展するなかで、奉天總商會の影響力が擴大していく。その過程で利用されたのが、商會聯合會である東三省商會聯合會と全省商會聯合會とであったとする。東三省商會聯合會は東三省の總商會が聯盟して設立したが、會長には奉天總商會會長の張志良が就任するなど奉天總商會の影響力が强かった。全省商會聯合會は「省內の問題解決のため」の事業を取りあつかった。奉天總商會（遼寧總商會）はこの兩者の機能を使い分けて、省レベル、東三省レベルでの問題解決、合意形成をおこなったとする。清末の時點では、東北の商人はばらばらであると指摘されたが、一九二〇年代後半になると奉天總商會を中心に東三省規模でのまとまりを商人層は示すようになったとする。そして、こうした動向は奉天の經濟事情の變化が導いたものであり、奉天經濟の變化について檢證する第二部へと續く。

「第六章　一九二〇年代東北の經濟構造――金融・特產物取引における權力の伸張」では、東北經濟の構造變化を四段階に分けて考察する。第一段階（～一九〇五年）は、農產物の集荷は在地化した山東や河北に祖籍がある商人がおこない、農村への販賣は東北の外で生產されたものを山東商人が販賣する。金融は民間業者の山西商人が爲替業務をおこない、各都市での兩替は錢莊、銀莊がおこなった時期。第二段階（一九〇五～一九一一年）は、一九〇五年の奉天官銀號の成立を劃期とし、政府系金融機關の勢力が增して民間の金融業者が衰退した時期。第三段階（一九一二～一九二三年）は、開原に東

三省官銀號の支店が置かれた一九一二年を起點とし、政府系金融機關の影響が特産物の集荷におよぶようになった時期。第四段階（一九二四～一九三一年）は、奉天紡紗廠の設立により、東北外に依存した物資の代替が進み、雜貨商の勢力が弱體化する時期としている。

「第七章　東三省官銀號の東北經濟における役割――支店網の擴大と附帶事業」では、東三省官銀號の沿革について述べ、次いで事業概要について述べる。一九一六年に張作霖が奉天省政權を掌握した後、東三省官銀號の支店が擴大した。不換紙幣であった奉天票を使った大豆賣買のやり方や、どのように利益を得ていたのか、そのメカニズムについて解說する。そして、東三省官銀號が行っていた重大な附帶事業である糧棧の業務內容について詳說する。大豆賣買に關わった官商筋、準官商筋の糧棧は東三省官銀號と密接な關係性を持っており、權力性商人として活動したとする。權力性商人は一九二〇年代後半にはその獨占性を强めるとともに、特産物賣買で得た利益を輸入代替品製造業に投資していたと指摘する。

「第八章　東北における近代産業の育成――奉天紡紗廠を中心に」では、一九二三年に開業した奉天紡紗廠の設立經緯について述べる。次いで、經營狀況について述べる。東北産棉花を原料にしていたが、その集荷は行政の力もかりて、棉花生産者に奉天紡紗廠への棉花賣却を優先するように呼び掛けていた。製造された綿製品は東北市場で販賣されており、一九二三～二九年までは常に利益をあげていたことを述べる。

「第九章　奉天票暴落期の倒産から見る經濟界――新興零細資本と傳統的商業資本」では、一九二〇年代後半における奉天商工業者の動向について、資本規模別による分布狀況を檢證するとともに、金融業、流通・貿易業、特産物取り扱い業、近代的工業に分類して考察する。次いで、檔案を使い、奉天總商會の商事公斷處がおこなった倒産處理の具體的な事例について考察する。そして、一九二七年一月から三月までの倒産傾向を日本側の調査に依據して檢證し、奉天の商工業者は基底部には多數の零細資本、傳統的ネットワークにより安定的に營業している商工業者がおり、そのうえに奉天政權の權力を背景とした商工業者が存在したとする。

第三部では、同郷團體のセーフティネットから漏れる流入者を救濟した組織である奉天同學堂の動向について述べている。

「第十章　同學堂に集まる人々――棲流所と游民・貧民對策」では、流民・貧民の狀況、それらを取り締まった警察機構の狀況について概觀する。次いで、貧民救濟を行った棲流所、貧民收容所の動向、勞働者として自立することを目指していた貧民習藝所、教養工廠の動向を考察する。社會の治安を混亂させる流民・貧民に對して、奉天ではどのような對應がとられていたのか述べている。

「第十一章　同學堂に集まる女たち――移民社會における濟良所の役割」では、虐待や理不盡な仕事の强要を受けた女性を保護し、仕事先や嫁ぎ先を紹介していた濟良所の動向について考察する。

「第十二章　同學堂とはなにか」では、同學堂の設立經緯、沿革、運營について述べ、とくに政治權力との關係性について考察している。

「終章」では、「政府の地域經濟への關與の强化によって、商會の組織のありようは次第に變化していった」とする一方、政府の支援を受けた近代的工業經營者が奉天經濟界の主軸となり、「水平的な人的ネットワークが重視される社會から、權力による垂直的な上意下達が重視される社會」に變化したとする。こうした新たな商工業者の登場により、都市も膨張を續け、さまざまな人々が流入してきた。流民・貧民は社會不安を高めるとの考えから、彼ら彼女らを保護、救濟する組織が存在した。總括的に、奉天の近代は「權力の强力な指導」が特徴であり、權力を利用する經濟人が生まれ、そうした人物（張志良など）が奉天の近代を切り開いていたことを主張している。

以上が本書の內容である。以下では、評者が疑問と考えた三點について述べてみたい。

第一に、本書全體の敍述の仕方についてである。研究論文はこれまでの研究をどう總括し、自己の見解が過去の研究とどのように違うのかを明確に述べる必要がある。本書は過去の研究を擧げてはいるが、それらの先行研究と本書の內容と

の關係性について明確には述べていない。どの點で、いかなる史料に依據して、どのような解釋をおこない、これまでの研究史を前進させたのか評者にはうまく讀み取れなかった。

この點は「權力性商人」という用語に端的にあらわれている。なぜ官僚資本や官商という用語を使わずに「權力性商人」という用語を使うのか、その理由として「舊來からの用語をつかわず、『權力性』という修飾語で表現するのは、この時期の奉天を見る際に、權力との密接な關係の取り結び方は注目に値するためである」（一三頁）としている。この說明から、これまでの研究史とは違う用語を使用する意味を理解できる讀み手は多くないと考える。別の箇所では「積極的に政府に命令を出させるなど、政府の權力をつかった存在を權力性商人とカテゴライズ」し、「權力性商人は權力への依存の志向性が極めて強く、政府との間に距離をとることが少ない點で、ほかと一線を劃している」（三一頁）と述べている。「ほかと一線を劃している」と述べているが、何と一線を劃しているのか不明である。奉天で活動した他の商工業者なのか、奉天以外の場所で活動した商工業者なのか、評者には讀み取ることができなかった。東北の商人が政府と密接に關係していた點は、石田武彥「中國東北における糧棧の動向」『經濟學研究（北海道大學）』二四卷一號、一九七四年が指摘しており、石田武彥論文の見解とどう違うのか說明が必要である。

研究史との關わりがよくわからない點としては、流通モデル（一〇九頁）の說明にもある。官銀號設立以前では山西票莊が金融業務をしていたとしているが、營口の過爐銀に代表される振替決濟の位置づけはどうなっているのであろうか。公議會について考察した倉橋正直「營口の公議會」『歷史學研究』四八一號、一九八〇年では、公議會の機能として振替決濟を擧げている。營口の過爐銀は一九二〇年代でも殘っており、滿洲國期に廢止された、振替決濟は流通モデルのなかに位置附ける必要はないのであろうか。また、こうした東北の流通モデルの作成は、安冨歩『「滿洲國」の金融』創文社、一九九七年もしている。これとの關係性についても述べる必要があろう。この流通モデルの問題點は、地域通貨（奉天票）がどのように國際通貨（鈔票、金票）と交換され、不換紙幣である地域通貨が富としての實態を持つに至ったのかの

プロセスについての考察が缺けている點である。鈔票を發行した横濱正金銀行、金票を發行した朝鮮銀行の活動については日本植民地金融史研究において分厚い蓄積があり、そうした研究成果をどのように考えているのだろうか。

第二に、本書が主張する權力性商人を中心とする東北經濟の構造について疑問を述べたい。本書の第七章では、張作霖政權は奉天票の發行をおこない、東三省官銀號を通じて糧棧に融資をし、特産物賣買で利益をあげ、その利益を奉天紡紗廠などの近代工業に投資した。この一聯の過程に深く關わっていたのが權力性商人であったとしている。しかしながら、奉天票を發行して大豆賣買から利益を得ていた張作霖政權にとっての最重要課題が、財政支出の八割以上を占めた軍事費の捻出にあった點に疑問の餘地はない。軍事力增强に偏重した財政運營をしていた張作霖政權の動向が、奉天の商工業者にどのような影響を與えていたのか、本書ではまったく考察されていない。張作霖政權からすれば、奉天紡紗廠よりも東三省兵工廠の擴充に關與してくれる經濟人のほうが重要であったのではないか。

特産物賣買で利益をあげ、その利益を奉天紡紗廠などの近代工業に投資する過程に關わっていたのが權力性商人だと指摘するが、そうした權力性商人の實態についての論證はやや混亂している。表七―七（一二四～一二五頁）で奉天省城の主要糧棧の動向を日本人が編纂した史料をもとに作成している。これをもとに、官商筋・準官商筋糧棧に該當するものを抽出し、結論的に次のように述べる。「官商筋・準官商筋糧棧といわれるところの權力性商人が特産物のうち人々の自家消費分ともいうべきものの流通によって財力をたくわえるシステムが奉天省城には存在していた」（一二七頁）。特産物の自家消費だけで財力をたくわえられたのかどうかは不問に付するが、この文章では「官商筋・準官商筋といわれるところの權力性商人」と述べており、官商筋・準官商筋＝權力性商人という表現になっている。官商筋・準官商筋糧棧はすべて權力性商人ということなのか、評者にはよく理解できなかった。權力性商人とはだれであったのか。著者は表六―一（一一一頁）にある「資本規模十萬元以上の主要大資本」に關わった人たちを想定しているようだが、こうした動向をとくに政府との結びつきが「際だって强い」とまで評價できるのか疑問である。

第三に指摘したい點は、遼寧省檔案館の所藏史料を使い、從來不明であったどのような事實を明らかにし、いかなる論點を研究史に加えたのかよくわからない敍述になっていることである。著者は戰前に滿鐵などが作成した調査報告書は、所詮は外國人が作ったものであり、現地社會の理解が不十分なので檔案のほうが史料的價値はあると述べている。しかしながら、本書ではさまざま箇所で檔案ではなく、日本人が作成した調査報告書を論據にしている。とくに東三省官銀號について考察した第七章で論據している史料の多くは、戰前の日本人が作成したものである。東三省官銀號が糧棧のおこなう特產物の賣買から、どのように利益を得ていたのかについては、日本の戰後の研究では小林英夫「滿州金融構造の再編成過程」『日本帝國主義下の滿州』御茶の水書房、一九七二年、以來關心が持たれているテーマである。殘念ながら本書の敍述は、日本人が作成した調査報告書に依據した小林英夫論文を超える內容にはなっていない。また、「『滿洲國』期については檔案が一般には開放されておらず、民國期と同樣の質の史料をつかうことができないことも對象から外す大きな要因である」（四頁）と述べている點にも違和感を持つ。確かに滿洲國中央政府の公文書は未だ公開されていないが、滿洲國の政策立案に關わった人たちの文書（例えば片倉衷文書、美濃部洋次文書など）の史料的價値は高い。史料館所藏の公文書だから史料的價値が高いというわけではあるまい。中國史に限らず、歷史研究における「檔案第一主義」的な傾向には批判が存在する。苦勞して檔案を讀解したにもかかわらず、既知の史料にも記述されていたという「悲喜劇」が懸念されている。

最後に、奉天の日本人の位置附けについて疑問を述べたい。著者は「多くの中國人にとっては、日本人は日常の關心の外」にあり、「日本人の存在が奉天の地域社會から意識されるのは、政策や行政區分とかかわる場面においてなのである」（三一三頁）と、日本人と中國人との關わりについて述べている。確かに、日常生活では日本人は滿鐵附屬地、中國人は奉天城內と住み分けて生活していたが、兩者の經濟活動が獨立的、個別的におこなわれていたわけではない。相互に關わった點を視野の外に置いているようで疑問に感じた。日本から輸入される綿製品や雜貨は、一九二〇年代でも無視できない

ものがあった。中國人富裕層は政治的變動が起きた時、例えば郭松齡の反亂に際してなど、滿鐵附屬地を自らの生命や財の避難所として使っていた。奉天という都市は奉天城內、商埠地、滿鐵附屬地から構成されており、それぞれが相互に結び附きながら、協力や對立を經ながら近代を歩んできたと評者は考える。對日ボイコットに參加したい氣持ちはあるが、日本製品をボイコットすると賣る商品がなくなってしまう中國人物品販賣業者、取引のある日本國內の業者の意向を氣にして様子を見ている中國人貿易商など、商人の反應もさまざまであった。奉天總商會がそうした多様な商工業者をいかにまとめ、どのように對應していたのか、中國人の論理から述べて欲しかった。

以上、長々と疑問點について述べたが、本書が奉天の近代史研究に一石を投じたことは間違いない。より深く、より總合的に奉天の近代を描き出すことが、評者を含めて、これからの課題となっている。

二〇一八年二月　京都　京都大學學術出版會
二二糎　六十三六七十三頁　四〇〇〇圓＋税